

2022年7月24日 礼拝説教要旨

詩編講解説教116 「弱り果てた魂に」

詩編116：1～11、マタイ9：35～38

詩編第116編は、冒頭「わたしは主を愛する」という言葉で始まります。神さまを愛するとは具体的にどういうことでしょうか。第116編では、「主を呼ぶ」あるいは「主の御名を呼ぶ」という言葉が繰り返されます(2、4、13、17節)。「呼ぶ」(カーラー)という言葉が、第116編を貫く一つのキーワードとなっています。「呼ぶ」(カーラー)とは具体的に声を出して語りかけるということです。それは「祈り」と理解することもできますし、第116編の後半では「満願の献げ物」(14、18節)「感謝のいけにえ」(17節)という言葉がありますから、神殿で献げる礼拝が想定されていると理解してよいでしょう。祈り、礼拝こそ神さまを愛するもっとも基本的な行為であります。

神さまを呼ぶということで思い浮かぶ一つの詩があります。キリスト者の詩人、八木重吉の詩です。

みんなもよびな

「あかんぼは なぜ あん あん あん あん なくのだろうか。

ほんとに うるせいよ あん あん あん あん

うるさか ないよ うるさか ないよ

よんでるんだよ かみさまをよんでるんだよ

みんなもよびな あんなに しつこく よびな」

八木重吉は、赤ちゃんが泣いているのを見て「かみさまをよんでるんだよ」と言いました。実は6節の「哀れな人」と訳されている言葉(ペタイーム)は「単純さ」「未熟さ」を意味する言葉ですが、ラテン語の旧約聖書ではそれこそ「赤ん坊」と訳しているそうです。赤ちゃんが泣く理由はお腹が空いていることや、オムツをかえてほしいということがあるでしょう。そこにはちゃんと泣く理由があって、泣いたら応えてくれる人がいるから泣くのです。そこには愛する人と愛される人の関係性があります。赤ちゃんは自分が愛されていることを知っているので思いっきり泣くことができます。反対に愛を感じなくなれば泣かなくなります。悲しいことですが、育児放棄された赤ちゃんは泣くことを諦めてしまうと言われます。わたしたちが神さまに祈り、礼拝を献げるのも、それは神さまから愛されているからに他なりません。

気をつけてほしいのは、わたしたちが愛するから神さまが愛してくださるのではなく、わたしたちが愛する前から、それに先んじて、まず神さまの方がわたしたちを愛してくださっており、神さまの愛が常に先行しているということです。それが神さまの「呼びかけ」にあらわれています。何より創世記の人間の創造では「神は人を創造された日、神に似せてこれを造られ、男と女に創造された。創造の日に、彼らを祝福されて、人と名付けられた」(5：1～2)とあります。「人と名付けられた」と訳されているのは、直訳すると「その名をアダムと呼ばれた」となります。ここにも「呼ぶ」(カーラー)が使われています。約束を破ったアダムとエバに対して聖書には「主なる神はアダムと呼ばれた。『どこにいるのか』」(3：9)ここにも「呼ぶ」(カーラー)が使われています。

それはイエス・キリストにも見られることです。木に登った徴税人ザアカイに「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」(ルカ19：5)と声をかけ、名

前を呼ばれました。教会を迫害していたパウロには「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか。わたしは、あなたが迫害しているイエスである」と呼びかけられます。主の呼びかけが常に先行します。神さまの愛が先立つのです。「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります」(Iヨハネ4:10)とあります。そのように赤ん坊のように小さく弱いわたしたちに神さまは声をかけ呼びかけてくださり愛を注いでくださいました。

そしてこの神さまの呼びかけが具体的な形となって現れたのがイエス・キリストに他なりません。主イエスはまことの人となられ、やがて十字架で死なれ、陰府にまで降られたと教会は告白します。そのようにして神さまの呼びかけは低きの極みまで届くものとなりました。そしてキリストは三日目によみがえり、天に昇られました。そのようにしてわたしたちが神さまの愛に答えて、神さまを呼ぶことができるようにしてくださったのであります。「あなたはわたしの魂を死から、わたしの目を涙から、わたしの足を突き落とそうとする者から助け出してくださいました」(8節) この御言葉はイエス・キリストによって成就しました。

そしてそのように神さまに呼びかけられたわたしたちもまたこの呼びかけに応え、呼びかける者とされていきます。神さまに対する祈りや礼拝はもちろんですが、隣人に対する愛の業が始められるでしょう。弱り果てた魂に寄り添い、声をかけ、励ますこと。何より誰かのために祈ることができます。時々、週報に「覚えて祈りましょう」と書きますが、これは常套句ではありません。友のために祈ること、それが弱り果てた魂を支えるのです。

今、高校野球の県大会が行われています。先日、久しぶりに藤崎台に観に行きました。わたしは負けているチームがどういう戦い方をするのか、どういう応援をするのかに興味があります。そのチームはピッチャーが四人くらい交代しました。最後に投げていた子は自分が投げるとは思っていなかったのかもしれませんが。コントロールが定まらず続けてフォアボールを出した。そのピッチャーの子はもうだめだと天を仰ぐような格好をしました。するとベンチからなのか、応援席からなのか、分かりませんが「へこたれるな！」という声がありました。その子はそういう声援もあって最後まで投げ抜きました。わたしはこの「へこたれるな」という言葉を久しぶりに聞きました。何か自分に言われているような気がしてわたしの魂にも響きました。

生きていれば辛いことがたくさんあります。この詩の内容から詩人は病気だったと言われます。そのように病いに伏す苦しみがあります。また人から欺かれるような経験をして悲しい思いをすることもあられるでしょう。でもその弱り果てた魂に呼びかける言葉が必ずあります。家族が、仲間が呼びかける。信仰の友が呼びかける。それだけで救われるのです。何より神さまが呼びかけてくださる。キリストを通して、その嘆きに寄り添ってくださる。それこそ「へこたれるな」と御言葉を語り続けてくださいます。その愛にわたしたちは支えられています。